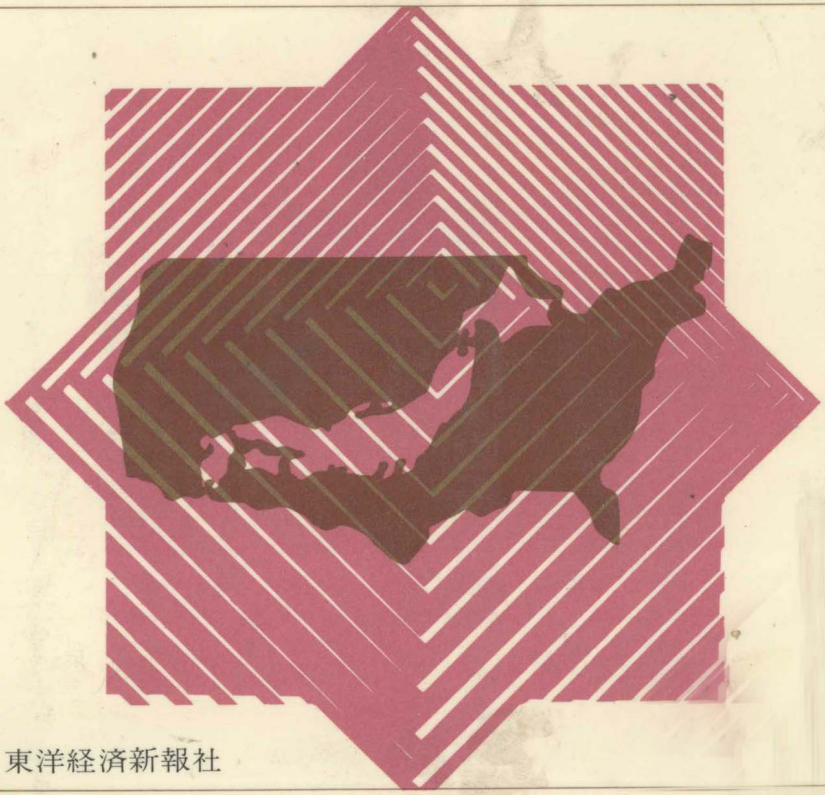
経済学の世界
アメリカと日本

佐和隆光 著

東経選書



東洋経済新報社

東経選書

経済学の世界 アメリカと日本

佐和隆光 著

東洋経済新報社

著者紹介

1942年　和歌山県に生まれる.
1965年　東京大学経済学部卒業，同学部助手を経て，現在京都大学経済研究所助教授.
専　攻　計量経済学，統計学（経済学博士）
著　書　『計量経済学の基礎』東洋経済新報社，『数量経済分析の基礎』筑摩書房，『初等統計解析』新曜社，『形態と構造』みすず書房，『回帰分析』朝倉書店，〈訳書〉L.R.クライン『経済予測の理論』筑摩書房，A.R.バーグストロム『経済モデルの基礎』東洋経済新報社，C.E.V.レッサー『初等計量経済学』東洋経済新報社，など.

経済学の世界　アメリカと日本　　定価 1000円

昭和54年6月14日発行

著　者　佐和隆光（さわたかみつ）
発行者　中井義行
発行所　東京都中央区日本橋本石町1の4　東洋経済新報社
郵便番号 103　電話03(270)4111(大代表)　振替口座東京3-6518

© 1979〈検印省略〉落丁・乱丁本はお取替えいたします.
3033-3165-5214
Printed in Japan

はしがき

職業的エコノミスト七万人、経済学会会員総数二万人、一年間に誕生する経済学博士八〇〇人、同じく経済学修士二〇〇〇人、カーター政府の閣僚中に経済学博士五人。これらの数字は、経済学がいかほどまで、アメリカ社会に蔓延しているかをみごとに物語っている。こうした数字を「アメリカにおいて、サイエンスとしての経済学がいかに尊重されているか」を示す証拠である、という単純素朴な見方をする人もいる。

通算して四年間、アメリカ経済学の「世界」に身を置いてみて、私が体験し観察したことから推すかぎり、右の数字には、もっと深い意味が隠されている。その意味が、私なりに読めた思いがしたのは、一九七五年から七七年にかけての、二度目の滞米に際してのことであった。

読者に唐突との印象を与えることを承知のうえで、私の「読み」を短い文章で要約して述べれば、

「アメリカにおいて経済学は、一つの『制度』なのである」。同じことをいいかえれば、アメリカにおいては、エコノミストと称する、巨大な職業集団の存在が、社会的に容認されている。

話は変わるが、アメリカという国では、弁護士のやっかいにならずじまいで、つつがなく一生をまっとうするのは、まことに希有なことだそうである。中産階級ともなれば、ホーム・ドクターと並んで、ホーム・ロイヤー（電話一本で有料の法律相談にのってくれる弁護士）を抱えている。日常的な生活者にとって、弁護士をほとんど必要としないわが国の現状とは大違いである。同じことが、経済学ないしエコノミストについてもいえる。アメリカの官庁や企業が、経済に関連のあるなにごとかを企てようとすれば、博士または修士の肩書きのあるエコノミストの処方箋が必要なのである。

「制度」とは一般に、法律や慣行を通して確立せられた、人間の社会生活上、一定の具体的役割をになうもののことである。アメリカという社会が、多数の弁護士を必要とし、また同時に、多数のエコノミストを必要とするのは、これらのプロフェッショナルが、慣行を通して確立せられた「制度」のにない手として、役割社会の一環に組み込まれているからにほかならない。

経済学に関していえば、それがいわゆる「サイエンス」かどうかなどといったことは、たいして関係がない。経済学に基づく経済分析という儀式が、制度化され、それをになう巨大な職業集団が存在している、という事実。これが、冒頭に掲げた数字の「意味」なのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

同じことが経営学についてもいえる。読者もご承知のとおり、アメリカには夥しい数のビジネス・スクール（経営大学院）がある。ビジネス・スクールの卒業証書である経営学修士（MBA）の肩書きが、ビジネス・エリートたるためのライセンスである。海軍の図上演習もどきのケース・スタディに真剣に取り組み、数式混じりの決定理論に頭をいためる。こうした学習が、はたして経営者としての実戦的手腕にどうつながるのか、はなはだ疑問である。実のところ、役立つか役立たないかは、どうでもいいのである。要は、ビジネス教育というものが、これまた一個の「制度」として、社会的に容認されていること、いいかえれば、「ビジネス・エリートはMBAでなければならない」という暗黙の社会的取決めこそが、ビジネス・スクール隆盛のゆえんなのである。話は多少それるが、何から何まで専門家扱いするのは、アメリカ社会の発明した社会安定装置の一つといえる。

経済学や経営学が「制度化」している国は、アメリカをおいてほかに例をみない。ヨーロッパの諸国や日本にも、経済学や経営学はあるにはあるが、「制度」と呼ぶにはほど遠い。また、エコノミストやビジネスマンを、専門的職業人とみなす社会風潮も乏しい。それではいったいなぜ経済学はアメリカにおいてのみ「制度化」されたのであろうか。この設問に一つの解答を与えること、それがこの本の主要な課題である。

自然科学にしろ社会科学にしろ、科学の理論というものは、「その時代、その社会の大多数の人々

が支持している、という状況の下で、はじめて「客観的」なものとして是認される（村上陽一郎著『新しい科学論』講談社、一九一～二ページ）。いいかえれば、その時代と社会の大多数の人々の「ものの考え方」と共鳴し合ってはじめて、科学の理論は「客観性」という錦の御旗を手に入れる。自然科学の理論が、右に述べたとおりであることを説くには、科学哲学者の叡知をもってしても、たいへんな手間暇を要することであろう。しかし、社会科学において右のような事情のあることは、くどくどしく説明するまでもなく明らかだろう。

だとすれば、場所と時代を抜きにして、経済学の現実味や現実的有効性について議論するのは、見当はずれのそしりを免れない。同じ経済理論が、いまの日本でいたって抽象的にみえても、現代のアメリカ社会という場に置いてみれば、生き生きとした現実味を帯びてくることだってある。

経済学は「資本主義経済の運動法則を解明する科学である」だとか、「理論を離れて現実が存在する」とか、「データの蓄積によって理論が進歩する」とかいった、素朴唯物論ないし素朴ベーコン主義に慣らされた大方の読者にとって、経済学は「制度」であるという私のことばは、いささか唐突の響きをもつことだろうし、また経済学を侮辱されたように思われるかもしれない。しかしよく考えてみれば、自然科学はずいぶん昔から、ほとんどすべての工業化された社会において「制度」なのである。その意味では、経済学も（アメリカという限られた地域においてではあるが）ようやく一人前の

「科学」としての認知を受けた、ということにもなろう。

さて、この本は、次のような順序で編まれている。まず第Ⅰ部「経済学とアメリカ社会」で、アメリカの大学の教師として、また一人の生活者として、都合四年間アメリカに住んでみた私の体験と観察を、なるべく具体的に述べてみる。アメリカを論じた書物やエッセーは、枚挙の暇がないくらいに多い。一巻の書物で、アメリカの全貌を描き尽くすなどということは、とうてい望むべくもない。それぞれの著者が、アメリカという巨象を一刀両断した切口、つまりアメリカの一断面を描き尽くすのが、精一杯の仕業である。さまざまな、ときには矛盾したアメリカ像が混在するのも道理である。アメリカという立体を両断する切口は無数に多くありうる。私もここで、「経済学の制度化」という視点から、アメリカを切ってみた。その切口の具体的実相を描いてみたのが、この本の第Ⅰ部である。

第Ⅰ部で述べた私のアメリカ体験を、知識社会学風に「解釈」してみたのが、引き続く第Ⅱ部「経済学の制度化」である。ここで私のいいたいことを要約して述べれば、以下のとおりである。アメリカにおいて経済学が制度化されたのは、経済学の理論と、アメリカ社会の基本コードとの同型性による。

それでははたして日本ではどうなのか。日本において経済学は、どの程度まで、またどういう形で「制度化」されているのかを、あらためて問い直してみる。日本とアメリカの両国における「経済学

の世界」を対比させてみることにより、二つの社会の根本的な差異の一局面を抉り出してみたい。

経済学の「制度化」のためには、数理化と数量化が、欠くことのできない前提条件である。経済学の理論を生み出す動因となった、思想的かつ文化的背景というものを、数学によって「脱色」しないかぎり、経済学の「制度化」はかなえられない。たとえば、かのケインズ経済学にしても、一九五〇年代のアメリカにおいて、数学的に定式化され、計量モデルの体裁を与えられたからこそ、今日みられるような展開を遂げたのである。しかしその半面、ケインズ経済学の最も本質的な部分が切り落とされたのではないか、という反省が、近年たかまりつつあるのは、当然の成り行きといえようか。

経済学の「数理化」および「計量化」の功と罪の両側面を考え直してみることが、第Ⅲ部「数理経済学再考」の課題である。マクロ計量モデル分析は、わが国の経済諸官庁や民間企業において、一個の「制度」として定着している。まずはじめに、「制度」としてのマクロモデル分析の意味を探ってみることにより、計量経済学の現代的意義というものを明らかにしてみたい。

数理経済学は、近年、数学的高度化へ向けて、猛烈な勢いで直走り続けている。際限のない数理化というものが、私たちの経済をみる眼に、どういう斬新な視点を提供してくれるのだろうか。あるいは、こうした高度の数理化は、結局のところデカダンに終始するのだろうか。こうした問題に関する私なりの見解を、第Ⅲ部の後半部に綴って、この本の締めくくりとしたい。

いまから三年ほど前、雑誌『東洋経済』（臨増・近代経済学シリーズ）の編集部から、何かアメリカの経済学の状況について綴ってみないか、との誘いを受けた。誘われるままに私は、アメリカ経済学の世界について、ひごろなにげなく見聞きし感じていたことを、広重徹氏のいう「科学の制度化」と重ね合わせて描いてみることにした。これを皮切りに、「経済学の制度化」に関連する一連のエッセーを、『東洋経済』、『経済セミナー』などに連載した。これらのエッセーを中心に、既発表エッセーを集め、加筆訂正のうえ、できあがったのがこの本である。

各章の基となったエッセーの掲載場所と年次は、次のとおりである。

1　『経済セミナー』一九七八年一二月号（原題「アメリカ経済学教育の実相・制度化された経済学1」）
2　『経済セミナー』一九七九年一月号（原題「アメリカ社会のタテマエとホンネ・制度化された経済学2」）
3　『経済セミナー』一九七九年三月号（原題「四年間のアメリカ体験・制度化された経済学3」）
4　『中央公論』一九七八年六月号（原題「生活のなかの資本主義」）
5　『東洋経済』（臨増・近代経済学シリーズ）四〇号、一九七六年四月八日号（原題「制度としての経済学――アメリカ経済学の知識社会学的考察――」）
6　『東洋経済』（臨増・近代経済学シリーズ）四四号、一九七八年四月一九日号（原題「新古典派経済学とアメリカ社会――ルールとしての合理主義と経済学の制度化――」）
7　『東洋経済』（臨増・近代経済学シリーズ）四五号、一九七八年七月五日号（原題「日本における経済学

制度化の歩み(上)――故渡部経彦教授を偲んで――」)

8 『東洋経済』(臨増・近代経済学シリーズ)四六号、一九七八年一〇月一八日号(原題「日本における経済学制度化の歩み(下)――故渡部経彦教授を偲んで――」)

9 『東洋経済』(臨増・近代経済学シリーズ)四二号、一九七七年一〇月二七日号(原題「〝制度〟としてのマクロモデル分析――大型マクロモデルの独り歩きと計量経済学――」)

10 『経済セミナー』一九七四年六月号(原題「数理経済学への幻滅と期待」)

11 『数理科学』一九七五年四月号(原題「経済学の数理――極大・均衡・成長――」)

12 『経済セミナー』一九七三年一〇月号(原題「カタストロフィの理論と経済学(上)」)

最後に、原稿のとりまとめから編集にいたるまで、すみずみまで心を配って本書の刊行にあたられた東洋経済新報社の丸山常喜氏には、心からの感謝の気持ちを表するしだいである。

一九七九年五月

佐和隆光

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

はしがき

第I部　経済学とアメリカ社会

1　アメリカの経済学教育……3

「経済学の制度化」の発見　3

イリノイ大学のランキング　6

多様な人間の寄合所帯　8

エコノミストの再生産構造　10

経済分析をつかさどる司祭たち　13

ポジションを獲得するための秘訣 …… 15

2 アメリカの大学教授 …… 18

業績と昇格・昇給 …… 18
良き教師は良き研究者? …… 20
専門誌のレフェリー制度 …… 23
「業績」の認知過程 …… 25
勘定高い楽天家たち …… 28

3 統計的社会＝アメリカ …… 30

コンピュータPh・Dの品質 …… 30
はびこる数理万能主義 …… 33
モラトリアム型の日本人留学生 …… 35
大学ランキングの決め手 …… 39
「制度化」というキーワード …… 41

4　生活のなかの資本主義……43
流出頭脳のUターン現象　43
人づきあいと専門家能力　46
基本コードの解読　50
日本のルールは何なのか　52
「話しやすい」友邦・日本　54

第II部　経済学の制度化

5　制度としての経済学……61
制度化されたアメリカの専門家集団　61
蔓延する数量主義　66
数理経済学の現実的レレバンス　72
ありありと見たパラダイムの存在　77

6 ルールとしての合理主義……81
思考の流儀の普遍化 81
「価値規範」に成り上がった新古典派経済学 85
経済学の職業化 90
「権威の方法」で制度化されたアメリカ経済学 92

7 日本における経済学の制度化……98
近代経済学の揺籃期 98
日本における制度化のテイク・オフ 102
経済諸官庁に普及した経済学の手法 105
紆余曲折した日本の制度化 107
自前の餅つく日本的「制度化」 110

8 経済学の制度化と故渡部教授……112
学風を決定づけたスタンフォード留学 112

熱狂と興奮の日々　115
経済分析の制度的定着に邁進　118
研究至上主義と業績競争主義　120
「トレードオフ」を認識の基本に　122

第Ⅲ部　数理経済学再考

9　大型モデルの独り歩きと計量経済学……129
経済学「制度化」の推進力　129
マクロモデルの脱アカデミズム現象　134
モデルと現実の越えがたい溝　138
いまやモデル作成者のビジョンの記述　141

10　数理経済学への幻滅と期待……146
数理経済学者への質問と反論　146

数理経済学の流行と沈滞 152
数学的方法とは何か 154
言語としての数学 156
袋小路からの脱出は可能か 159

11 経済学と数学の蜜月時代は終わったのか……162
数量的世界観の成立 162
限界効用学派の台頭 164
極大化の原理 167
均衡分析の数学 168
経済成長の数学理論 173
さて何処へ 175

12 カタストロフ理論と経済学……177
ジャーナリズムの評価 177

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com